
天使からの選択肢 T h i r d

ナイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使からの選択肢 T h i r d

【Nコード】

N 2 5 5 5 X

【作者名】

ナイン

【あらすじ】

人生の中で、今後を左右するほどの分岐点は誰にでも訪れるものである。その時の選択が己の運命を大きく変えることになる。この物語の主人公の土田はじめは、勝負運が弱く負け犬人生をおくってきた。そこに天使と名乗る少女が現れ、一世一代の大勝負をしないかと誘われる。見事勝負に勝てばバラ色人生、負ければ地獄…この大勝負にはじめは…。

勝負する男

またここまで来てしまった…。どうせ入る勇気なんてないんだが。あと一歩踏み出すと取り返しのがたなくなるようで怖いのだ。

「…だめだ、帰ろう。」

回れ右をした土田はじめはそのまま家に帰ることにした。

はじめは3万4千円の二階建てアパートに一人暮らしだ。25歳のフリーターで月に11万くらいの収入だ。

「ただいまっ」と。

今夜の夕食もコンビ二弁当だ。最近は生姜焼き弁当を好んで買っている。炊事をすればもう少しバランスの良い食生活になるのだがはじめは料理が苦手だった。

はじめは温めた弁当を食べながらスポーツ新聞を広げた。

「…やっぱこれはまだ早いよなあ…。」

そういいながらプロ野球関連の記事に目を移した。そこには去年のシーズンオフにメジャーリーグに電撃移籍した投手の記事があった。その投手はプロ7年目の中継ぎ投手だった。チームには必要な選手だったがスポットライトを浴びることはなかった。

彼は「俺はアメリカで勝負して絶対成功して見せる！」そう言っただけで彼はアメリカに旅立った。

記事には、アメリカでは先発投手に転向し、日本人初の20勝をあ

げて来年の年棒が5倍になったことが書かれてあった。まさにアメリカンドリームをつかんだのだ。

「アメリカに渡ることは本当に怖かった。日本か、アメリカか何日も迷いました。けど、自分の可能性を信じて本当に良かったと思います。」

彼は人生の分岐点で見事に成功者へ続く道を選んだのだと、はじめは思った。

「いいなあ…、俺なら日本に残ったんだろうな。」

はじめは自覚していることが一つある、それは勝負運がかなり弱いということだ。ジャンケン、トランプ、ゲームと勝った記憶がほとんどない。

草野球で代打で出た時も、変化球を待っていたらストレートがくる、ストレートを待てば変化球と…結局、相手投手の投げってくる球を読むことができず三振。ここぞというときに勝てないのだ。

ただ、はじめには野望があった。それは一度でいいからギャンブルで大金を得たい！という野望だ。今まで負け続けたのだからそろそろ大勝がきてもおかしくないはずだ。

そこではじめはバイト帰りに毎日パチンコ屋の入り口までは行くようになったのだがどうしても店内に入る勇気がまだない…。それにはじめは1万、2万を勝ちたいのではない。小さな運をコツコツ使いたいわけでもない、大きく勝ちたいのだ。

まずはじめが目を付けたのはスロットだった。スロットは勉強すれば勝てると思っている。そのため猛勉強したはじめはスロットの知識はパチプロ並みにある、なのでいつでも勝負しに行けるのだ。

しかしはじめはなかなか店に入れない…勇気が出ないのだ。

「…俺もこの投手みたいに人生逆転ホームラン打ちてえな…。明日こそはスロットやってみようかな。」

はじめにとってギャンブルは遊びではない、真剣勝負なのだ。今までの人生の借金を返済したいのだ。

「ああ神様！どうか背中を押してください！……なんてね。」
我ながらくだらないことを言ったと後悔した。

「…仕方ないですね、神様ではないですが天使が背中を押しましょうか？？」

背後から子供の声がした。驚いたはじめはすぐさま振り返った。

「誰！！？」

「初めまして！天使です！」

そこにはとてもかわいい羽の生えた女の子が立っていた。

勝負する男2

退屈な毎日、変わらない日常…、俺はこの日々をただただ機械的に過ごしていき、その辺で知り合った女を嫁にもらい、二人くらい子を産んでもらって、中の下の家を築き、やがて年をとって死んでいくのかなって…、そんな人生だろうと思っていた。

…今の今までは…。

目の前にいるのは天使と名乗る女の子がいる。予想外の出来事で、俺の思考回路は完全に混乱した。

「ええつと…、どちら様？」

「私、見習い天使のマナといいます！今日はあなたにチャンスを持つてきました。」

何を言っているのか全く分からない…、とりあえず本物なのだろうか？こんな唐突な話を信じてよいものだろうか…。

「…あのー、ちょっと失礼。」

はじめはマナの羽を触ろうとした。その時いきなり静電気と呼ぶには優しすぎるほどの電気が体中を駆け巡った。

「ぎゃっ！」

死ぬかと思った。雷が落ちたといわれても納得できる衝撃だった。

「レディーの身体に触れるなんてセクハラですよ！失礼ですね！」

マナは頭の湯気が見えるほどプリプリと怒っている。

「ごめんなさい…、ただ今ので君が人間じゃないことはわかったよ。で、天使の君が何のようだい？」

俺はこんな非日常を心のどこかで期待していたのかもしれない、今の状況に鼓動がとても早い。

「…さっきも言いましたが、あなたにチャンスを持ってきたんです。

」

目を見てくれない、まだ怒っているのだろうか。

「さっきは本当にごめん！もう君のことを疑ったりしてないし、羽にも触らない。君が俺のもとに來た理由を詳しく教えてくれないかな？」

マナは少し機嫌がなおったのか初めて目を見てくれた。よく見るととても愛らしく、可愛い顔をしていた。

「じゃあ仲直りの印にオレンジジュースを下さい。100%じゃないとダメですよ！」

俺はすぐに冷蔵庫を開けた。しかし、牛乳しかなかった。

「この中で、ミルク好きな人！？」

幼稚園児ならどんな子でも手を挙げそうなフレーズとテンションで

乗り切ろうと試みた。しかし、甘かった。

「オ・レ・ン・ジ・ジュ・ウ・ス!!」

「すぐ帰ってくるから絶対帰らないでよ!!」

俺はすぐにコンビニまで駆けていった。なぜか全力疾走でも笑顔がこぼれた。

勝負する男3

「ごちそうさまでした！」

マナは手を合わせてお辞儀した。とても礼儀正しい。

「じゃさっそくで悪いんだけどさっき言ってたチャンスのこと教えてー！」

こんなに興奮するのは子供の時以来だ。人間とは未知のことに対して興味、希望、不安などいろんな感情が生まれるのかもしれない。

「じゃ一つ質問です。どんなチャンスがほしいですか？だいたい想像はつくんですが…。」

「さすが天使さま！話が早いね。お察しの通りだと思っただが俺は今ギャンブルで大勝したいんだ！できれば一生贅沢できるくらいのお金をギャンブルで手に入れてみたいんだ。ただ勘違いはしないでくれ！別にギャンブルが好きじゃなく、勝ちは一回きりにするつもりだし…。そんな一世一代の大勝負のチャンスがほしい！」

マナはうんうんと目をつぶりながらうなずいた。

「わかりました。ではそのように準備します。ただしギャンブルにはリスクもつきものであると肝に銘じていてくださいね。」

「了解！」

「ではここで、そのチャンスの説明をいたします。一度しか言わないのでよく聞いてください。まず、今から私の持っているこの本を読んでもらいます。この本の中にはあなたの人生の詳細全てが書いてあります。今から1週間与えるので一言一句全てを読んでください。」

この話を聞きながら脈がどんどん早くなっていくのがわかった。手や脇にも汗がにじんでくる。マナは大きな本を床に置くとパタパタ宙に浮きだした。

「まずはじっくり読んで自分自身の弱点を見つけてくださいね！きつと答えが見えてきますから。」

そういうとマナは消えていった。

静まり返った部屋に、はじめの鼓動だけが激しく音をたてていた。

勝負する男4

本の1ページ目には『誕生』という文字が書いてあった。ここからはじめの物語が始まったのだ。

はじめはゆっくりと自分の人生を振り返った。懐かしいという感情もあるのだが、一番は恥ずかしいという思いでいっぱいだった。例えば髪型、なぜこのような髪型で学校に行けたのだろう…。

流行とは恐ろしいものである。まあはじめのなかだけの流行りだったのだが…。

「今の頭脳と性格で中1からやり直したいなあ…。ぜったい勉強していい大学に入るのに。」

はじめはくだらない独り言を言っただけで、また真剣に本を読み始めた。とにかく勝負事での弱点を探すことに集中した。

何度も何度も読んだ。5日目には人生本も、もう3回目に入入している。しかし、弱点なんて見当たらなかった。

「なんなんだよ。弱点なんてないじゃないか…。」

そもそも今までの負け犬人生はすべて運が悪かったと思い込んでいた。人は先入観を持ちながら物事を考えた場合、真実が一つになっってしまう。物事を一つの方角からしか見えないのだ。

「…休憩するか。」

はじめはマナのために買ってきたオレンジジュースの残りをコップに注いだ。

そして、空を見上げながらふと、草野球に出たときのことを思い返していた。

「本にも書いてあったけど、なんで1球もバットにかすらなかったのかなあ。」

試合当日までに張り切って素振りしたり、バッティングセンターに通っていた。草野球に対しての下準備や努力はしていたのだ。

なのに結果が出ていない……。これを運という言葉で片付けていいものだろうか。

運だけではない何かがあるのだろうか。それはいい……。

運命のリミットまであと2日。

勝負する男5

はじめは今までの負けごとをピックアップした。

ジャンケン、トランプ、ゲーム、野球…、これらに共通するものは何だろう。すべて運の気がするのだが…。

いや、ここで考えることをやめたら終わりだ。なにか勝率を上げる方法があるのではないだろうか。

例えばジャンケンだ。さすがに必勝法まではないだろうが…。

「そうだ!!」

今度は本の中でジャンケンだけに的を絞って調べてみた。そこではじめは小さな発見をした。

「最初はグー……。これだ!!」

今までジャンケンをする時の掛け声は基本的に『最初はグー』なのだ。この行動がジャンケンの勝敗を左右することがわかった。

はじめが気づいたこと…それはジャンケンをする時に、勢いよく『最初はグー!』、人はグーの後、8割の確率でグー以外を出していた。ということはチョキを出せば最低でもアイコになる。

はじめはこの発見が心から嬉しかった。この見解が間違ってたっていい、自分の中での勝負事の必勝パターンが初めて生まれたことに嬉しかった。

気分を良くしたはじめはオレンジジュースを飲みほし、ベットにダイブした。

天井を見上げ、ニヤニヤと子供の様に笑った。今までにない自信が沸いてきていた。

「ようするに『読み』だな。」

何かを悟ったかように呟いた。

勝負事に対しては常に相手との心の勝負なのだ。トランプ、ゲームなども例外ではない。野球だってそうだ！俺とピッチャーの思考の読み合いだったのだ。それはギャンブルも同じなのだろうと感じていた。

「…いけるな！」

この熱が冷めないうちに早くマナと会いたかった。

勝負する男6

「おはようございます。」

7日目の朝、目が覚めるとマナはオレンジジュースを飲みながらはじめが起きるのを待っていた。

「おはよう。」

はじめは妙に落ち着いていた。あの興奮が嘘だったみたいだ。

「しっかり自分と向き合えたようですね。弱点は見つかりましたか？」

はじめはニヤツと笑ってうなずいた。この自信が運命の日であつても落ち着ける要因なのだろう。

「そついえば何で勝負しますか？」

「えっ！？自分で決めていいの！？なら競馬がいい！！」

彼女のいないはじめは休みの日に競馬のデータを常にとっていた。そもそも馬が好きだったこともあり、特に勉強をすることもなく競馬新聞記者と同じ程度の知識を持っている。

「わかりました。今日は金曜日なので明後日のレースを運命のレースとします。えっと…有馬記念ですね。」

有馬記念とは年末に行われるグランプリレースである。ファン投票

が行われ、選ばれし名馬たちが出馬する日本競馬の伝統レースである。

「そこまで絞ってくれるの！？要するに有馬記念で馬券を的中させればいいわけだ！まだレースまで時間があるしデータもとれる。なんか勝てそうな気がするな。」

「頑張ってください！」

マナはそういうと満面の笑顔で手を振りながら消えていった。

マナを見送ったはじめは部屋の洋服ダンスの奥から通帳を取り出した。残高を確認するとちょうど100万円入ってあった。少ない給料の中、自分の将来のためにコツコツと貯めた大切なお金だ。

「これを全額つぎ込んでやる。」

はじめは明るい将来のために通帳を持って銀行に向かった。

勝負する男7

ハラハラと雪がちらついていた。今年も残暑だったが12月になるとやはり寒い。

電車から見る通勤路はすぐに姿を変えてくれるので飽きなくていい。土曜日で空いていた車内はいつものように座席争いに参加しなくても窓側に座れることが出来た。

休日出勤のはじめは午前中だけ出勤する予定だ。年末はこの企業も忙しいものだ。

会社に着くとはじめの同期である能勢ひろしが喫煙ルームでコーヒを飲みながらスポーツ新聞を読んでいた。

「おはよ！土田君も今日は仕事？」

能勢ひろしは仕事に対してとてもまじめで丁寧な男である。典型的なA型で、上司からの信頼もあり将来有望な期待の社員だ。

「はよ！休日出勤さ、何読んでるの？」

能勢は野球が好きなのでどんな記事を読んでいるかは想像できた。だが意外な返事が返ってきた。

「突然なんだけど土田君は競馬ってやったことある？」

てっきり昨日のプロ野球の結果を見ていたと思っていたので少しび

つくりした。

「明日競馬デビューするつもりなんだけど…どうしたの？急に。」

偶然にしては出来すぎている…、これもマナの仕業なのだろうか。

「ほんと！？もしお邪魔じゃなかったら僕も明日、一緒に連れて行ってくれないかな！？」

嫌な予感的中した。この出来事は想定外だ…、誰かと一緒に行くなんてイメージにない、はじめはこのイレギュラーに戸惑った。しかし、ここで断つてもいい結果には繋がらない気がする…。

「いいけど、競馬なんて知ってるの？」

「実はね、一度でいいから競馬場に行ってみたかったんだ！今はデパートスポットになるくらい綺麗で、いろんなイベントがあるらしいじゃないか！今度、彼女を連れて行けるのかその下見がメインなんだけどね。」

なるほど、そういうことか。最近彼女が出来たことは聞いていたが…。

「デートに競馬場って渋いでしょ？きっと喜ぶと思うんだ。」

まあ害はないだろう。最悪、別行動でもかまわないとはじめは思った。

「俺も初めてだから案内は出来ないけどいいかな？」

「もちろん！」

運命の日、はじめは能勢とデートになってしまった。

勝負する男8

「お待たせ！」

はじめは能勢との待ち合わせの時間より5分前に着いたのだが、それでも能勢を待たせてしまったようだ。さすがに彼女がいる男は待ち慣れている。

二人の待ち合わせ場所は駅前にした。お互い車の免許は持っていたが、電車で行ったほうが渋滞もなくスムーズに行けると判断した。

電車の中は年末とあって、休日ながらそこそこ混んでいた。二人は西船橋駅で降りてバスで競馬場まで向かうつもりなのだがその頃には車内はパンパンだろう。

「やっぱり競馬って最近人気あるんだね。」

能勢の言葉にうんうんとうなづいた。確かに昔の親父くさいイメージはなくなってきたのかもしれない。車内には競馬新聞が全く似合わない女性グループも少なくなかった。

中山競馬場に着くと有馬記念が行われるとあって人で溢れかえっていた。発走の時間は15時40分だったのでそれまでは能勢のデートの下見に付き合うことにした。

施設内に入ったとき、二人は小さな歓声をあげた。想像以上に広く綺麗だった。

子供たちが遊べるチャイルドコーナーもあれば、おじいちゃんたち

にも配慮したシニアサロンなどいろいろなサービスがあった。

二人はとりあえず昼食にしようということになり案内板でレストランを探した。そこでも店の数に多さにまた驚いた。

「ほんとにサービス充実してるね！これなら彼女も喜んでくれそう。」

能勢はとんかつを食べながら嬉しそうに話した。確かに競馬に興味がない人でも楽しめそうだ。

「そうそう！僕、パドックっていうの見てみたいんだ。せっかくだし有馬記念、僕も買ってみるよ。」

能勢はそう言う和有馬記念のパドックの時間を調べ始めた。

パドックでは、レース前の競走馬を間近で見ることができる。ここで競走馬の気配などを確認して予想に役立てるのだ。

競馬場をウロウロしていた時間が長かったのか、パドックは10分後に迫っていた。二人は急いで会計を済ましてパドックに向かった。

パドックでは人がたくさん集まっていたが馬の姿はしっかり確認できた。

1枠1番の馬から順番に18頭出てきた時、突然はじめは胸騒ぎがした。一気に冷や汗があふれ出した。

勝負する男9

パドックで18頭の馬を見渡した時、ある疑問がはじめの頭に浮かんだ。

この中で1着になる馬を当てるのか？18分の1の確率じゃないか…。これに必死で貯めた100万円を賭けるのか？

それは怖い…。もともと勝負運がないのに当てれるはずがない。

そこにもう1つ、はじめの頭の中に疑問が生まれた。

でもこれなら、俺のもとにマナが来ても来なくても一緒だったんじゃないだろうか。今の俺の状況はただ単に100万持って競馬しに来ただけじゃないか…。天使の存在の意味がない。

何か確率を上げるヒントがあるはず…。

「！！？」

はじめは気づいた。この2日間で不自然だった出来事を。

能勢だ。いきなり競馬に連れてってくれなんておかしいと思ったんだ。能勢が重要なキーマンなんだと確信した。

「なあ能勢君、この馬の中で気になる馬とかいないかな？直感でもいいから思ったことを教えてくれない？」

その言葉に能勢はかなり驚いたようだ。

「僕もビックリしたんだけど、パドックを見てて3頭ほど馬が光って見えるんだ！オーラが見えるっていうのかな…。自分でも驚いてるんだけど、これがビギナーズラックってやつかな？」

能勢が光って見えたという馬は全部で3頭だった。

1頭目は1番人気の大本命馬、レッドドラゴン。この馬は今、5連勝中で勢いがある。

2頭目は9番人気の馬、ダークマン。人気はあまりないが調教師の話によると体調は絶好調らしい。

3頭目は18番人気の馬、ドリームドリーム。このレースを最後に現役を引退するようだ。

はじめはこの3頭にすべてを賭ける決心をした。

勝負する男10

「普通に考えたらレッドドラゴンだね？あんまり競馬知らないんだけど新聞には ばっかりだし。」

たしかに今までの成績も安定していて勢いがある。だが、人気あまりにもありすぎる…。これでは配当金が安いだろう。

「レッドドラゴンのオッズって今どのくらいになってる？」

オッズとは人気を数字で表したもので、この数字が配当金に関わってくるのだ。例えばオッズが2・0だったとする、ならこの馬に100円を賭けて的中した場合200円になって返ってくるのだ。

「4・8倍だよ。」

ということは、的中した場合100万が480万になるわけだ。

「ダークマンとドリームドリームも教えてくれ！」

能勢によると、ダークマンは26・3倍、ドリームドリームはなんと125・9倍だった。ドリームドリームに100万賭け、的中すれば1億2590万じゃないか…。

この中以外ではもう考えないようにしよう。たぶん、いや絶対この中から優勝馬が出るはずだ。たぶん33万ずつ賭ければ絶対勝てそうなんだけど…、それはしたくないな。一点勝負にすべてを賭ける！

しかしまた特徴のある3頭だな。確実に本命を選ぶのか、それとも

夢を期待して穴馬にしようか…。1億なんて考えてしまつとなあ…。
「欲」に打ち勝たないと冷静な判断ができない。

「ちょっとタバコ吸ってくるわ。」

はじめはタバコを吸いながらこの1週間を振り返った。何とも信じがたい出来事の連続だったが、とうとうこの時を迎えたのか。この選択が俺の人生を変える。

あの本を読んで勝負は「読み」だと考えた。馬の調子、騎手、レース展開…すべてを読まなければならないと、今日まですべての馬のデータを調べあげていた。ネット情報や雑誌もすみずみ読んだ。ここまで1つのことに集中したのは人生で初めてかもしれない。

能勢に3頭を聞いたときは驚いた。この馬に人生を賭けてみようと思っていた馬がその中に入っていたからだ。まさかとは思ったが嬉しかった…。俺の予想に自信が持てた。

このタバコが吸い終わったら馬券を買いに行こうと思う。

ダークマンの馬券を。

勝負する男11

俺は100万馬券を握りしめ、能勢のもとへ戻った。

「遅かったね。もう馬券買ったの？」

さすがに100万も使ったことは知られたくもなかったので曖昧な返事をかえした。

やはり100万を一点勝負に賭けるのは本当に勇気が必要だった。怖かった…、何年もかけて貯めたお金をギャンブルにつき込むなんて…。

はじめはダークマン単勝100万の馬券をしっかりと握りしめていた。

「僕も馬券買いたいからどうやって買うのか教えてくれない？ドリームドリーム買ってみるよ。名前が気に入ったからさ。」

そう言つて能勢は1000円だけドリームドリームの馬券を買った。心の中ではじめは、能勢と同じ馬にならなくてよかったと思った。素人と同じでは自信が持てなかっただろう。

二人はゴール前が見えやすいところでレース開催を待った。発走まであと3分だ。

はじめはその時間、震えが止まらなかった。今までの人生でここまでの大勝負なんて経験がない。あと10分後には確実に人生が変わっているだろう。

はじめは極度の緊張と興奮で吐きそうだった。涙さえ出てきそうだった。

大金が入ったら二度とギャンブルには手を出さず、自分の店でも開いてみようか、将来のために貯金もいい。

もし外れたら…。

「始まるよ!!」

中山競馬場にファンファーレが響き渡ったと同時に大歓声が沸きあがった。

運命の有馬記念がスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2555x/>

天使からの選択肢 T h i r d

2011年10月21日11時03分発行